
てすと

模倣刀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
てすと

【Nコード】
N3453X

【作者名】
模倣刀

【あらすじ】
投稿テストです。

テストということであげてます

はじまり

人を試す。

いくら、教師というものであるとコレは良いことなのだろうか時々思う。

確かに、人を仕分けるというのに試験というのは安易であり、簡単だ。

点数さえみていればいいのだからね。

ただ、点数だけで分けてしまうとその子の勉強ができると言うこと、記憶力がいいということ、それに対する成績をつけてしまう。

……いや、こういうことをだらだらと書いてしまうと終わりが無いので端的にいおう。僕は個性というものを評価してあげたいと思うのだ。

真面目ないち

その子は真面目である。

「せんせーさよならー」

いや、普通な生徒であるというべきなんだと思う。
そして、普通であるということは教師としてみていると普通な事である。と言い切れる。

「せんせーせんせー。暇だねー」

「そうか？つていうか暇なら帰りなさい。」

「えー？せんせーこんな可愛い子が話し掛けてあげてるっていつのにつめたーい」

「ああはいはい。そうだねー。暇なら課題あげようかー？」

「せんせーさよならー」

と、僕になつくでもなく、ほどほどの距離にいる子が真面目である。
と言える子なのだ。

「おお？」

「え、あ、先生。」

特に何もなく、学校帰り、参考書を読んでる生徒を見掛ける。というか、自分のクラスの生徒であるのだが。

「そういえば、公立志望だっけ？」

「そうですよ。もう悪あがきともいえる時期ですからね。」

「そうかそうか。」

「先生つて、生徒の事って気にしてます？」

「んー。一応二年間教えてきたし、志望するところについてくれたらいいなって思ってるよ。」

「そうですか。いや、そうですね……」

「どうかした？」

「いえ、特に何でも無いですよ。」

それでは、そういつてその子とは別れた。

どこでもあるような会話。真面目な子というのは思い詰めると怖い。そう思い知るのもう少し先のお話。

おふざけなに

「まっわるー！いや、まだまだ回るよ！むしろゲージが振り切れちゃつよおおおおお！？」

「せんせー。いつも通り騒がしいです。アレ。」

「いや、先生でも休憩時間までは何も言わないからね？」

「せんせーから許可もおりたしどんどんまわるよおおー！ひーはあ！！」

「……先生」

「いや、ごめん。」

通常運行でもずれている子はいる。特に誰それとはいわないが、いることはいる。

この子の場合、目立ちたいというよりも楽しんでもらいたいというのが第一にある。だから、行動しながらホントに迷惑を掛けたならきちんと謝れる子でもある。

「せんせー。せんせーも回ってみない？」

と、ふらふらになりながら声を掛けてくる。
当然ながらそんな馬鹿げた事は

「手を広げて全力で回ればいいんだな？」

する。

当然、注意して欲しそうにしてた子は白い目でみってくるが、二人で立ち上がらして強制的に回したら最後には笑ってくれた。そして、学科会議に遅れて、主任にねちっこく怒られた。

いつか、絶対革靴の踵に画鋏さしてやる。歩くたびにかちかちなつてタップダンス、もといタップウォークさしてやる。

とか、まあそんな話は脇に置いておく。
人を笑わせるという意志を持ち行動する。

そんな少女がいる。自分へと返ってくる評価は奇人変人の類、だがそれすらも矜持として持つというのはなかなか辛いものだと思う。

まあ、案外本人が気付いて無いのかも知れないが

「ねえ、先生。」

「ん？何かした？」

「いやー、せんせーって、先生だけど、せんせーっぽくないよね？」

「それは、威厳がないということか？」

いや、まさかそんな？それでも清く正しく馬鹿馬鹿しくをモットーにしているわけで

「威厳つて、そりゃせんせーには元から無いでしょー。そういうことじゃなくてさ。あんまり怒らないよね」

「まあそりゃ p t a がうるさいからな」

どやって顔で見ると、そうかもだけどそういうことじゃないんだよなー。なははって笑われた。

「まあ、それは置いて。ここに呼ばれた理由って分かってる？」

「んー。何となくだけど、一応。」

「んじゃ手っ取り早く話してくれる？」

「はいはい。えっとねー、つい、見てたら確かめてみたくてさ。ぐっと押したらつるつといつちゃったんだ。いやーあれにはー」

「まで。何の話だ。」

「え？教頭のヅラめくりについてじゃないの？」

「違う違う。失踪事件の方だよ。全く、そんな面白そうな時にいなかったとは。」

「あはは、そっちかつ。いやー、指導室に呼ばれるなんて思わなかったからさ。」

そう言つて笑う。ちなみにいつやったのか聞くと昼休みの終わりとのこと。教頭に聞くように言われたのが昼休みの最初だったことを考えるともつたいないことをしたと思う。もうもう少し一緒にいたならば！！

いや、ねちっこいからやっぱやだな。

「んで？何か知らない？」

「残念ながら何も。まだ三日目だからねー。何も噂は聞いてないかな。」

「まあそつだよなー。」

「でさー、先生。先生って生徒の事好きにとかならないの？」

「それこそ、ptaが飛んでくる話だな。生徒はそりや可愛いよ。ただ、あくまでも上の立場ってところから見てって話だけだね。」

「ふむ、そういうのは好きだよ。勿論下の立場って意味からだけだね。」

えへへーって笑いあう。こういう風に笑って言い合える関係。生徒、教師間であつたっていいじゃないか。

委員長さん

「先生。これ、どうするんですか？」

「ん？なに？」

「文化祭の出品について、ですよ。」

「あー、いつまでだっけ？あ、やっぱり答えなくていい。次のHRでそれやるから、司会もろもろよろしく、委員長。」

わざわざ職員室まで来て言ってくれる。次のHRすること決まっていなかったから有難い。

「どうした？委員長？まだ何かあった？」

面倒臭そうな目、所謂白い目で見てくる。

「いえー？先生の適当差加減にビックリしてるだけですよ？」

えー？普通だと思っただけだねー。

「教師ってこんなもんだよね？」

「いえいえ、今まで見てきた先生に先生みたいな人いませんでしたから」

おー？凄いいんだね、当たり前引き続けるとは、いや、外れかな？っていうと、駄目だ、この先生。っておっしゃって教室へと帰ってい

った。

いやはや、責任感が強い、いや、人の手助けをしたがるお節介かき
っていうのもいい個性だと思うんだけどね。

「今日も休み、欠席無しです先生。」

「うし、HR始めるよー。今日のは文化祭について、司会は委員長
がやってくれるんで、後はよろしく。」

そういつて委員長から出席簿を預かる。

「先生に無責任にも任せられたので、始めます。一応先輩達が優先
的に飲食店をやるということなので、私達は飲食店は出来ないと思
って下さい。」

「えーっ。それって猫耳メイド喫茶とか出来ないの!？」

そう言つて、周りを笑わせる女の子が一人。男子がやると引かれる
のにこの差は何だろうとちよっと思わないでもない。

「そもそもそんなのは却下です。」

そう言つて白い目を向ける委員長。

「だったら、お化け屋敷とかどうだろう？定番だろ？」

そういう男子。うん、ある意味模範回答だよな！。

奇をてらわないでどうするの！？とか叫んでるこがいるが少数派。
簡単に淘汰され、クラスがお化け屋敷でいつかとなっていく。悔し
そうな顔をしているな！って思つたら、何か思い付いた顔をして最
後には引き下がっていった。教師としては何も見ていない。個人的
に何をするのかは楽しみにしておこう。

「にしても、先生。」

「何？」

「この時期から文化祭の準備つて速くないですか？」

「5月でしょ？文化祭9月だし、交流深めるって意味でこれぐらい
から行つて見たいだね。」

「成る程、ありがとうございます。」

いえいえ、そう返して、またお願いねーって言ったあたりでチャイムがなった。

因みに、お化け屋敷になったようで、まあ普通だよな。

遊びに行きたいし

「さよならー。」

「あ、ちよつと待つて。」

「何？早く出たいんだけど。」

男子を呼び止める。課題出さないとヤバイよーって伝えるがのらりくらりとかわされる。

「何か決めるってときには意見を出すのに、自分のことだと適当だよね。」

「そりゃね。ゲーセンなりカラオケなり、行くためには放課後まで時間を掛けて決めたくないからね。」

「ほう、そりゃそうだ。だが、課題ださないと後々自分に返ってくるぞ」

「そんなときはそんなときになってから考えるよ。もういい？約束あるんだけど」

そういつて分かれる。いい子何だけどねえ。快樂主義というかなんというか……

とまどついつ

「せ、んせ……?」

「ん?どうかしたのー?」

「いや、そのさ、せんせって、凄いやね。」

「えー?ほんと?どこらへんがって聞いてもいい?」

「あー、いや、何となく。そう思ったただけなんだけどさ。」

こついうほわほわしてる子もいる。

「ふふふ、私かい?気にしたら駄目だよ?」

右手を顔の前に掲げてる子がいるが気にしないでおく。本人がそう言ってるし

「まあ、先生みたいな人にならない方がいいかも知れないよ?他の先生方に、あの先生はーとか言われるのって地味に辛いからね」

はあ、とか言ってくれる。後ろで、先生酷い、無視するなんて!?よよよ、とかいってる子がいる気がしたけど気のせいでしょう。

「せ、せんせ？何して、るの？」

あはっ

弟のむ

「姉の担任ってあんただよな？」

「君は……ああ、この間失踪した彼女の弟か。」

「そうだよ！何で、あんたはそんなに冷静何だよ？心配じゃないのか？」

「いや、心配だよ。」

「じゃあどうして！と騒ぎ続けるので職員室ではなく別の部屋に行こうと指導室へと連れていく。」

「あれから一ヶ月。何も無しか？」

「何も見つからないね。」

「ホントにちゃんと聞いているのかよ」

「勿論。聞いても情報が出てこないんだ。」

「くそっ！姉ちゃんどこいったんだよ。」

姉想いな弟って感じだよね。

可愛いよねえ。

きりきりな

あの先生のクラスになってから、人が一人居なくなつて引きこもりが一人でたらしいよね。

みたいだね。引きこもりつてあの子でしょ？たどたどしかった喋りの子ー

そうそう、そんな感じの子じゃなかったのにねー

うーん。しゃべり方ひとつ取つてみても誰か伝わる。言い方一つでも結構特定出来たりする。これつてやっぱり個性つていうのが現れているんだろうねえ。なんとも面白い話だよねえ。

さてさて、次からは少し時系列を正していこうかな。

ああ、誰か追い詰めきつてくれないかな。

探偵役は弟君かな？

いや、もしかすると……

気付くと黒いのが出てた

「やつほーっ。もしかしてこのクラスの人ー？」

「ああ、そうだが……クラス間違えてるぞ。」

「へ？ここって3組じゃないの？」

「3組は3組だが、2年のな。」

「ふえっ！？失礼しました！！」

そういつて慌てて教室から飛び出す私。初日からやつちやうなんて！

とは、思うものの恥ずかしかったけど取りなせる範囲！って気合い入れ直して改めて教室に入る。

「おはよー！！」

初日ぐらい誰か早く来ない？

響く声に切なくなつた私でした。

データとんだっ

「今日から授業開始となるわけなのだが、実質的に授業が始まるのは一週間後。それまでは短縮授業となる。」

と、これからの流れというものを説明している教頭。

担任の先生は確か昨日の入学式ではあってるから、どういうことだろうか？

何故説明してるのが教頭なの？

「すみません。担任の先生はどうされたんですか？」

いい質問っ

「今はいいない。続きを話すぞ。」

え？それだけ？理由ぐらい伝えてよ

とか思ってるうちに説明終了。

日直は名前の順に二人づつだとかが決まっただけ。良いのかな？

とか思ってたなら、明日担任が来てから決めたらいいと言って解散。自己紹介とか無いの？

と、まあこれで初日が終わったとき

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3453x/>

てすと

2011年11月16日18時42分発行